

## 石のカラト古墳の調査

平城宮跡発掘調査部

この調査は京都府教育委員会、奈良県教育委員会が日本住宅公団より委託を受けたものを、当研究所に依頼してきたものである。調査地は奈良県奈良市山陵町と京都府相楽郡木津町大字相楽にまたがる。調査期間は1979年1月9日から3月31日であった。当研究所の調査次数としては第115次—4である。古墳は平城ニュータウン内の緑地にとりこまれて保存される計画であるが、遊歩道が墳丘の西側を通る計画があり、そのため古墳の規模・範囲を確認することが目的であった。調査の結果、上円下方墳であることが判明し、石室構築法・墳丘築成等に関しても詳しい知見をえ、終末期古墳の研究に恰好の資料を提供した。

**墳丘** 版築法で2段に築成する上円下方墳である。墳丘裾で南北13.75m、東西13.80m、上円部径9.20m、高さは西辺で墳頂まで2.50m、第1段1.15m、第2段1.35mを測る。墳丘全体を河原石で葺き上げているが、上円部は残りが悪い。下方部裾に浅い溝を掘り、その中に石を立て、その上の斜面を小口積みで積み上げている。下方部四隅と上円部裾を結ぶ対角線に水みちを設けている。

**石室** 墳丘中央に位置し、凝灰岩の板石を組み合せた横口式石室である。主軸は国土方眼方位に対し13度48分西偏する。内法は長さ2.6m、幅1.03m、高さ1.06m。天井は0.1m程屋根型に割り込む。床・天井部各4、側壁各3、奥壁・扉各1の計16板の板石で構成される。石室の前面には墓道があり、幅約3mに復原される。墓道側壁はほぼ垂直で、底はU字状を呈す。床面にはコロの道板の抜き取り溝、墓道南端には墓前祭祀に関連するものと考えられる礫敷が検出された。

**遺物** 石室の埋土中から金・銀製の玉各1、コハク玉の破片、銀装太刀の鞘の資金具、鞘尻金具、金箔片、漆片などが出土した。漆片はすべて黒漆で剥離面に布目痕、木地の痕を残すものがあり、棺は木心乾漆棺と考えられる。土器は少量で、墓道の埋土から須恵器皿、墳丘南側の転石の間から須恵器杯A・蓋、土師器の小片が出土したにすぎない。

**外部施設** 墳丘下には、礫を詰めた3条の盲暗渠がある。墳丘周囲にも同様な排水施設があり、西と北には墳丘に平行する2条が、南には東南方向に1条が配されている。

(実測には9頁のロープウェイ方式による写真測量を用いた。なお詳細は「奈良山一Ⅲ 平城ニュータウン予定地内遺跡調査概報 京都府教育委員会・奈良県教育委員会 1979」を参照のこと。)

(巽 淳一郎)

石室内部(南から)